

おのきた

尾北校長室から

第29号



「過去」を変える ～ 新しい自分の創り方

尾道市街地の沖合に「百島^{ももしま}」という、フェリーで対岸まで10分の小さな島がある。私の故郷である。高校時代、北高への通学は、尾道港までは50分余り、さらに港から本通商店街と「長江坂」を歩いて30分、片道1時間半だった。高校生になって初めて島外の学校に通い始めるが、その頃の話である。

始めの1か月ほどの海は、**学校と家とを「隔てる」否定的な存在**だった。当時は高度経済成長の途上で、都会に向けて人が急速に集まっていく時代。私も例にもれず、田舎と都会を二項対立的にとらえ、現在は真逆だが、当時は都会の生活に強い憧れを抱いていた。

初夏の午後、遠くに棧橋を見下ろす段々畑で、ミカンを消毒する父母を手伝いながら、行き来するフェリーを眺めていた時のこと。次の港に向かうフェリーの白い航跡が一本の線として続いていた。見慣れた景色ではあったが、対岸の港から白く引かれた線がやけに気になり、それがいきなり、私に「**新たな目**」を与えてくれた——海は何かを隔てるのではなく、「**つなぐ**」存在ではないか？



そう思えるようになると、確かに中世ベネチアの交易商人や北欧バイキングの人々にとって、海は港をつなぐ「道」であったはずである。現代でも、中東からの原油は陸路ではなく、大型タンカーに満載の海路である。物事は突然、その見方により180度変わるということに気付かされた。それから海を肯定的に見ることができるようになり、退屈でしかたなかった船通いの時間が「移動図書館」の如く、予・復習のための前向きな時間へと変わるきっかけの一つになった。海への見方を真逆に変えたこの日の景色は、40年以上たった今も鮮明な記憶となっている。

「過去は変えられないが、未来は変えられる」——確かにそうであろう。しかし私は、さらに「過去の『出来事』は変えられないが、その『見方』ならば過去も変えられる」と思う。その**事実をどう「解釈するか」**がすべてなのである。目の前の困難は、避けようとするればそれは立ちほだかる「壁」になるだろう。しかし覚悟して前に進めば、それは自分の「**成長への階段**」にもなり得るものとなるのではないか？ 壁となるか階段か、すべてはその人がどう見てどう行動するかである。



例えば、円柱という立体。真横から見る人には**長方形**に、真上から見る人には**円**に見える。同じものを見ていても、その人が見る位置によって異なる。いずれの人も自分は正しいと思っているのであるから、(そして、事実、部分的には正しいのであるから)多くの場合、その人をあからさまに指弾^{しどん}することは避けたほうがよい。私たちは、そういう人には、**見る位置を変えてみることをぞっと奨める**ようにしよう。まずは、自分が真に正しく円柱に見える位置をとることができていることが大切である。

過去の出来事にとらわれず、「新たな目」で自分を更新していこう。「昨日の自分」を少しでも超えていく努力を続けよう。600通りの小さな「自分創りの旅」が新たに始まることを期待したい。